

ハレ着

武庫川女子大学附属総合ミュージアム
2019年度「きもに見るモダン生活の軌跡」



大正期から昭和戦後期のハレ着は、一般人の男性では紋付羽織袴、女性では婚礼衣装や留袖であり、近代になって完成され、一般に普及しました。

女装では五つ紋付の振袖や留袖が定型で、正装とされます。正装は、色彩や文様・五つ紋付きなどの様式が決まった装いであるといえます。

文様は、鶴亀や牡丹、瑞鳥のような吉祥や祝儀を表す大文様が多く、摺箔や縫箔(刺繍)を配した華やかな染文様が一般的ですが、この時期には、洋花などを取り入れた西洋風の文様付けも行われました。文様の面積や配置に多様な趣向が見られますが、礼装には、祝儀の気分を華やかに表現する、全面文様も多く見られます。江戸時代後期から明治期にかけて礼装としての完成を見た裾文様もありました。豪華な丸帯や着付け用具としての帯揚げや帯締め、長襦袢の半衿、髪飾りや附属品に至るまで、鮮やかな色彩や金銀糸を取り入れた織りや刺繍、摺箔などの、吉祥と祝儀の意匠が詰め込まれています。

おでかけ着

武庫川女子大学附属総合ミュージアム
2019年度「きもに見るモダン生活の軌跡」



大正から昭和戦前期にかけて、女性が歌舞伎や茶会、同窓会、同好会などの社交の場に出るようになると、堅苦しい礼装ではなく単なるおしゃれ着でもない、その中間的な高揚感と気分を装うことが求められました。「訪問着」や「訪問服」、時には「ビジティング服」と称された、おでかけ着が求められるようになったのです。訪問着で代表されるおでかけ着は、外出行動を楽しむ女性の暮らしの変化に対応したものでした。

訪問着に付けられる家紋は、五つ紋付の正式礼装に比べ、やや格下の略式で一つ紋や三つ紋が一般的です。さらにくだけた縫紋や陰紋をつけることもあります。

訪問着は、ちょうどよい加減の改まったおでかけ着として発明されたといえます。男物礼装であった羽織が、女物のお出掛け用羽織となり普及したのもこの時期でした。

訪問着が略礼装として、改まった場面の正装に継ぐ装いになったのは、アジア太平洋戦争後のことです。

街着

武庫川女子大学附属総合ミュージアム
2019年度「きものに見るモダン生活の軌跡」



都市型の生活が浸透し、家の中にいた女性たちが職業に就いたり進学したりして、街に出るようになります。家の外へ、街へと登場する彼女たちによって、人々の間でおしゃれをするための街着が求められ、流行が作り出されました。銀座や心齋橋をそぞろ歩くための装いです。「銀ブラ」「心ブラ」という造語も知られています。

街着には、鮮やかな合成染料を使った型染の着尺や上等の御召縮緬が相応しいとされました。解し銘仙は、西洋風の図案や時事的話題に想を得た文様や、面白柄ともいわれる機知に富んだ趣向を凝らした先染めの文様を解し織りにしたもので、新鮮な感覚を持つおしゃれ着となりました。銘仙は、大家の女性たちには普段着でもありましたが、街着にふさわしいおしゃれ着となっていました。

街着

武庫川女子大学附属総合ミュージアム
2019年度「きものに見るモダン生活の軌跡」



街着・子供のきもの

武庫川女子大学附属総合ミュージアム
2019年度「きものに見るモダン生活の軌跡」



子供は、誕生から成人に至るまで様々な通過儀礼に寄せて、成長を願って様々な祈願が寄せられます。厄除けや豊穡と長寿、招福と学業成就等々。通過儀礼の節々で用意されるハレの祝着は、こうした想いを託された仕掛けとなっています。

医学の進歩によって、乳幼児の死亡率は驚異的に減少し、様々な祈願を託された民俗儀礼は旧弊なものとして形式化しました。しかし宮参りやお食い初め、初節句そして七五三の行事等々に祝着が用意されます。

子供のきものは、伝統を継承した意匠から、現代に生きる英雄や人気者までをモチーフとして、成長への祈りが込められ、愛らしい表情を醸し出しています。

和装服飾小物

武庫川女子大学附属総合ミュージアム
2019年度「きもに見るモダン生活の軌跡」



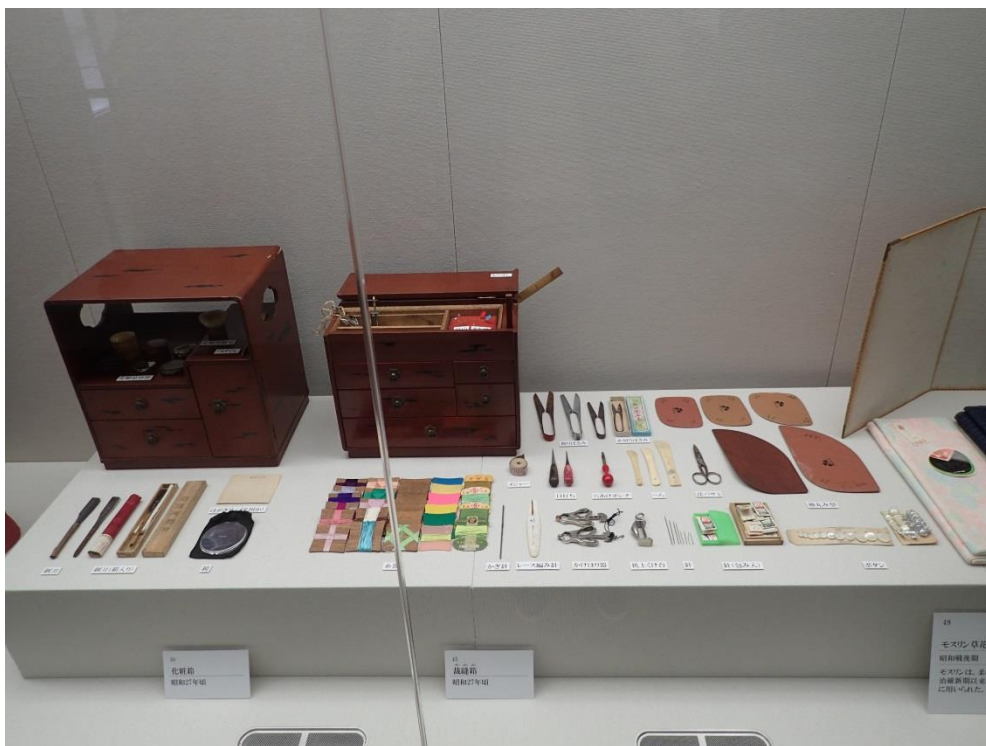
着物を装うには、長着や羽織、帯だけでなく、それらを着付けるための小物類が必要です。

和装服飾小物は、あからさまには見えないところで着付けの要所を抑えています。これらの一つひとつに趣向が凝らされるのも和装の特徴といえます。人々は、着衣の裾やちょっとした隙間からこぼれる彩りや重なり、襷などの表情に心を配ってきました。裾からこぼれる白い足袋の清楚さや袖の振りからちらっと見える襦袢の艶めき、広幅の豪華な帯に、帯揚げや帯締めのお合せが醸し出す調和や新奇さ等々。帯締めに止められる小さな帯留めは、季節の到来や儀礼の趣を巧みに演出し気付かせてくれます。外出時の持ち物を包む風呂敷や袋物、ショールやパラソルにまで、装う眼差しは行き届きます。

和装の表情は、こうした和装小物が奏でるアクセントと姿全体のハーモニー、アンサンブルを総合したシンフォニーともいえるようです。

裁縫道具・化粧道具

武庫川女子大学附属総合ミュージアム
2019年度「きもに見るモダン生活の軌跡」



裁縫道具と化粧道具は、筆筒類や下駄箱、茶筆筒や茶道具等と並ぶ花嫁道具の一つでした。

裁縫箱には、抽斗の隅々まで小さく巧妙に作られた、驚くほど多様な裁縫用具が詰め込まれています。裁縫道具は、衣を縫い、綴れをさす主婦や母親のかたわらに常にあつて、彼女たちの居場所や働く姿のシンボルとなっていました。

鏡台と化粧箱も又、身だしなみを整える装置として、女性の居場所に添えられる必需品です。装うための化粧品や、西洋風に髪にカーブをつけるための鋺のような秘密道具が大小の引き出しにひそんでいます。

裁縫道具と化粧道具は、モノづくりの職人道具のように細大もらさず目配りされ、壮観な趣を呈している一方で、メモ用の紙片のような日常の用事に対応するものも見つかり、主婦としての女性の暮らしを浮かび上がらせています。

教育標本

武庫川女子大学附属総合ミュージアム
2019年度「きもに見るモダン生活の軌跡」



京都府立女子専門学校(京都府女専)の教育標本が、一括して寄贈されています。明治初期、近代裁縫教育の先覚者・渡邊辰五郎によって、裁縫の一斉授業方式が始められ、考案した雛形尺による裁縫雛形の制作や、裁縫掛図による教授法などが工夫されて、裁縫は女子教育の中に根を下ろすものとなりました。

裁縫は作るだけでなく、合理的・科学的に技法を分析・分解することで理解することが求められました。そのための段階標本や部分縫標本が、きめ細かく作られました。さらに素材や染め、取り扱いに関する知識が実験的に教育され、観察のための標本資料が教材とされました。そうした実習や実験授業の工夫のためにつくられた教育標本が、別注の標本戸棚二棹にぎっしり詰められて受け継がれ、貴重な教育標本群を成しています。着物類の雛形や実物標本には、有職故実にのっとりた袴や直垂のような衣服も扱われる一方で、当時の生活で必需であった、破れを繕うための継ぎ接ぎの標本も目配りされています。

衣服裁縫や取り扱い方の教育を通して、近代的な衣生活の実践者の育成が目指されていたことが浮かび上がってきます。